技術ニュース

侵入害虫、クビアカツヤカミキリを山梨県に侵入・定着させないために

はじめに

クビアカツヤカミキリをご存知でしょうか。体長2.5～4㎝程の、体が黒くて、胸の部分だけが赤いカミキリムシです（写真1）。日本に類似したカミキリムシがいないのでちょっと異様な見た目に感じます。



◀写真1　クビアカツヤカミキリ雌（雄は触角が長い）

実は、クビアカツヤカミキリは侵入害虫として、最近日本に入ってきました。環境省により特定外来生物に指定されています。山梨県での捕獲記録はなく、まだ本県には侵入していないようです。しかし、このカミキリは本県に隣接する、東京都、埼玉県、神奈川県ではすでに捕獲されており、本県にいつ入って来ておかしくない状況となっています。

被害

クビアカツヤカミキリは、バラ科の樹木、サクラ、ウメ、モモ、スモモ等に被害を与えます。山梨県にはサクラの名所がたくさんあり、公園や学校などに植栽されたサクラも多く、これらへの被害が懸念されています。また、サクランボ、モモ、スモモは本県の重要な農産物であり、これらへの被害も心配されます。被害は日本ではバラ科樹木に限られているようですが、中国では、ヤナギ、クワ、カシ等も食害しているという報告があります。幹の生きている部分が食害されるので、木が衰弱し、被害が激しいと枯死します。また、材に多数の穴が開くので、幹の強度が落ち、更に穴から材内に腐朽が広がると幹がますます折れやすくなると考えられます。果樹における被害では、樹勢が落ちるため良い果実は得られなくなります。

日本での現在の分布

クビアカツヤカミキリは２０１１年頃からの数年間で、日本の複数箇所に持ち込まれました。この時期には、日本のみならず、ヨーロッパやアメリカにも本カミキリが持ち込まれています。日本では本カミキリがそれらの箇所から分布を拡大し、現在、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、愛知県、三重県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、徳島県の合計15の都府県で存在が確認されています（図1）。本県は関東地方の被害地に隣接し、前述したように、本カミキリが侵入して来る可能性が高まっています。



図1　本カミキリが分布する都府県（濃色）

生活史

クビアカツヤカミキリは、食樹（バラ科樹木）の樹皮（割目や隙間）に卵を産みます。成虫は後食（性成熟のための摂食活動）しなくても産卵することができ、産卵数は多く３００個程になります。幼虫は、はじめ樹皮下を食害しますが、やがて材部へと掘り進みます。その時、自分の糞と木くず（フラス）を外に排出します。このフラスは、始めは長く繋がりひも状ですが、やがて崩れて粉状になります（写真2）。



◀写真2　被害部から排出されるひも状のフラス

このクビアカツヤカミキリですが、東アジアのモンゴル、中国、北朝鮮、韓国、ベトナムと、広い範囲に自然分布しており、その地域の気候によって卵から成虫になるまでの期間が異なっています。これらの自然分布地では２年１化（２年間かけて卵から成虫に育つ）のことが多いのですが、暖地では１年１化、寒冷地では３年１化となります。現在の日本の侵入地ではほとんどが２年１化となっています。日本では、２回越冬

した幼虫は5月頃蛹化し、6月下旬～7月中旬に成虫が羽化し、樹幹に楕円形の穴（2～3㎝程）をあけて、脱出します（写真3）。



◀写真3　楕円形の脱出孔

対　策

防除対策として様々な方法が検討されていますが、発生地ではじわじわと広がる被害を抑えるまでには至っていません。このため、山梨県を始め未発生地では、クビアカツヤカミキリ幼虫等が内部に生息する本カミキリ被害木や被害丸太等を持ち込まないようにすることが重要です。また、侵入を早期に発見し、すぐに駆除して定着させないことも重要になります。そのためには、森林、公園樹木、街路樹、果樹等の管理者や関係者等なるべく多くの人に、本カミキリについて知ってもらい、多くの目で監視することが必要です。県自然共生推進課のホームページの「クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）について（https://www.pref.yamanashi.jp/shizen/gairaisei butu/kubiakatsuyakamikiri.html）」に、本カミキリのことが詳しく掲載されていますので是非参照して下さい。ここにあるように、発見した場合は、その場所の市町村や最寄りの林務環境事務所に連絡するようにお願いします。

まとめ（見分け方）

クビアカツヤカミキリの被害を他の被害と判別するための特徴について最後にまとめておきます。

特徴1　黒くて胸が赤い体長2.5～4㎝程のカミキリムシで、6月から発生する（写真1）。

特徴2　バラ科樹木、サクラ、モモ、スモモ、ウメ等に被害を与える。

特徴3　幼虫が木の中に入って食害を始めると、長く繋がった木くずが被害部から排出される（写真2）。

特徴4　成虫発生時に2～3㎝程の楕円形の脱出孔ができる（写真3）。

（図は県自然共生推進課、写真は愛知県森林・林業技術センター提供）

（森林総合研究所
専門員　大澤　正嗣）